19世紀イギリスにおける読書施設の研究(1)

——コーヒー・ハウスについて—

芝田正夫

19世紀中にイギリスにおける読者数と出版物の数は驚異的な増加を示した1)とするアルティック（Altick, Richard D.）の言葉に端的に示されるように、19世紀イギリスにおいて都市労働者が新たに読者層として登場してきたことは疑問の余地のないところである。筆者は別稿において、こうしたイギリスにおける大衆読者層形成を促した社会的、経済的要因を分析する作業の一環として、当時の様々な読書施設について検討を加えた2)。大衆読者層形成と何らかの関連のある施設としてとりあげたのは次の諸施設である。

1. circulating library
2. coffee house
3. mechanics’ institution
4. subscription library
5. working men's association

以上の諸施設について主に1849年に召集されたイギリス議会の公共図書館特別委員会報告書（以下委員会の議長名からエワート報告と略す）中の記述をもとに各々の性格および主たる利用者層を略述したが、3) その中で19世紀中期にロンドン市内に約2,000軒あり、コーヒーなどの飲物を提供するとともに、

多量の新聞、雑誌、図書を置き、読書をする場所をも提供したコーヒー・ハウスに特に注目をして、一般的には17世紀に起源をもつ中流階級のサロンとして考えられているコーヒー・ハウスが19世紀において大衆読者層拡大に果たした役割を確明することを今後の課題とした。本稿ではこのコーヒー・ハウスに焦点をあて、既に様々な領域においてなされている先行研究に依拠しながら、その実態と読者層形成に果たした役割を考えていきたい。

2

まずコーヒー・ハウスとはいかなる施設であったのか。Encyclopedia Americanaには次のような記述がみられる4)。

（コーヒー・ハウスは）交際のため、または思想や情報の交換のため、コーヒーを飲みながら人々が集まった場所である。（中略）イギリス最初のコーヒー・ハウスは1650年頃にオックスフォードに誕生し、次いでロンドンで1652年に設立された。その後急速に増加したが、扇動的な言動（seditious opinion）のセンターになることを恐れたチャールズ2世によって1675年に禁止令が出された。5)

コーヒーがヨーロッパに伝えられたのは16世紀で

(2) 拷稿「19世紀イギリスにおける大衆読者層の形成——読書施設の問題を中心に」（関西学院大学社会学部研究会『関西学院大学社会学部紀要』第40号 昭55年）
(3) 同委員会の報告書の正式な名称は Report from the select committee on public libraries: together with the proceedings of the committee, minutes of evidence, and appendix 議長は下院議員ウィリアム・エワート（William Ewart）であった。
(4) 1976年版による。Encyclopedia Britannica（1974年版）にも次のような記述がある。

コーヒーはロンドンのコーヒー・ハウスにおける飲物としてはじめて人気を得たが、コーヒー・ハウスは政治的、社会的、文学的、更には商業的影響力をもつセンターであった。
(5) ただしこの禁止令はわずか11日で撤回された。（角山栄他「産業革命と民衆」昭50年 河出書房新社 p.108)
あるが、コーヒー・ハウスはコーヒーを飲むためだけの場所ではなく、設立当初からサロンないしは集会場としても機能をし、政治的な問題を始めとする様々な討論や情報交換の場であったと考えられる。
さらにAmericanの説明を引用する。

18世紀中盤がイギリスのコーヒー・ハウスの黄金時代であった。ロンドンだけで2,000軒以上のコーヒー・ハウスが存在した。客寄せとそこでなされた会話のタイプにより特徴をもった店もあった。

中略コーヒー・ハウスは18世紀後期以降は衰退し始めた。衰退の理由はクラブやパブ、それに新聞がコーヒー・ハウスの機能の多くを奪ったからである。

以上の記述をみる限りでは、コーヒー・ハウスは18世紀にロンドンを中心に栄えたおそらく、中流階級の社交場として位置づけられよう。しかし18世紀後期には衰えたとされ、19世紀のコーヒー・ハウスについては触れられていない。ただ新聞の発達がコーヒー・ハウスの機能を奪ったとの指摘は、コーヒー・ハウスが新聞を読む場所としても機能したことを推測させる。

しかし前述のように、1849年当時にロンドンに数多くの労働者向けのコーヒー・ハウスが存在したことは、当時の記録が実証していることも事実であり、18世紀のコーヒー・ハウスと19世紀のコーヒー・ハウスの関連を明らかにすることが次課題となる。

3

コーヒー・ハウスについては次のような多様な分野において、それぞれの領域に関連した施設として紹介がなされている。

(1) 生活史研究の一環として

(6) 例えば、Will（コーヒー・ハウスの名）や Button は写実好きなインタリが集まり、ジョンソン博士（Dr. Johnson）や新聞発行者として著名なアディソン（Joseph Addison）やスティール（Sir Richard Steele），それにスウィフト（Jonathan Swift）らが常連であった。社会界の紳士淑女は White に集まり，Garraway や Lloyd には商人が集まったと伝えられている。

(7) 角山栄他 前掲書

(8) 前掲書 pp.95-96

なお次の文書にも同様のコーヒー・ハウスについての記述がある。
角山栄 茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の文化 昭55年 中央公論社（中公新書）pp.32-38
次に新聞史の領域であるが、佐藤毅氏によると、
コーヒー・ハウスは「多様な言説と情報がとび交わ
衝突しあうの共通」の場所、いわばトポス（Topos）
であったといってもよいだろう。それはミルズの言葉
tを取り扱っていえば「文化装置」であり、しかもハーバ
ーマスのいう「批判的公共性」によって貫かれてい
た。18世紀前期のコーヒー・ハウス衰退後は、コ
ーヒー・ハウスの中で成長した近代型新聞こそ、「コ
ーヒー・ハウスに代わる新たなトポス」を創出する
べきであったが、印刷税や誹謗法など「論説の自
由」を実質的に制限する制度があったために、事態
は簡単なものではなかったと述べ、ジャーナリズム
史でのコーヒー・ハウスの位置づけがなされている。
しかし、ここでも18世紀中期にはコーヒー・ハウス
は衰退したとされ、それ以後の推移については述べ
されていない。

19世紀に存在したコーヒー・ハウスについては構
部佑一郎氏がわずかな記述ながら、次のように記し
ている。やや長くなるが関連部分を引用する。

（産業革命期に）読者大衆の意を迎えて、新聞
や定期刊行物の類を広く読ませたのは、コーヒー
・ハウスや酒場であった。こうした場所が新聞雑
誌の「読み物」を提供してきたことは、遠くチャ
ールズ2世時代から、紛余曲折の社会状況と、
起伏変転の新聞界の状態を織り入って、少しも変らな
い社会的な習性とはなっていたが、イギリス産業
革命後はこれに拍車がかかった。ところロン
ドンに僅か14、5軒しかなかったコーヒー・ハウス
や酒場などが、それぞれを移し、1840年頃とも
なると1,600軒にふえ、しかも日増しに増加する一
方であった。同年、ある店では1杯のコーヒーを
1ペニー半で飲ませたが、当時の大小新聞報道紙
を43部も掲載、これに地方紙7種、外国紙6種、
雑誌24種、季刊紙4種、週刊紙11種も取扱い、
ここに集まってくる住客に奉仕したという。

ことでようやく19世紀中期のコーヒー・ハウスに
に関する記述に出会ったが、チャールズ2世時代のコ
ーヒー・ハウスとの関連など詳細な点には触れられ
ていない。

コーヒー・ハウスの道は「あらゆる階層の人々が
集まる場所」という機能を重視する立場に立った社
会教育史、成人教育史の領域からの研究もなされている。
ここでは奥田泰弘氏の研究をとりあげた。

奥田氏は主にケリー（Kelly, Thomas）の所説
を紹介しているが、まず次のようにコーヒー・ハウス
の特徴を述べている。

（コーヒー・ハウスは）お金払いさえすれば、
誰でも、身分に関係なくナイト（knite）であ
らうと平民（commoner）であろうと、主教
（bishop）であろうと教舎（curate）であ
らうと、富める商人であろうと貧しい従者であら
うと、空いている席に自由に坐せて、誰とも
話すことができ、どのような討論にも加わること
ができる。

こうした理解のうえで、コーヒー・ハウスを「17
世紀後半以降、イギリスの市民階級が集まった一種
のクラブ・ハウス」と規定し、「新興市民階級にと
っての知識と教養の源泉であった」とその機能を述
べている。さらに、新興市民階級のみではなく下層
階級も自由に利用できたコーヒー・ハウスは「近
代的であり民主的な文化機関」であったと評価して
いる。しかし、17世紀末には特定の会員のみ利用と
なり、民主的な性格も失われ、下層階級の人々は利用できなくなっていったとその後の推移をたどって
いる。

コーヒー・ハウス研究を深める事は今後の課題としながらも、奥田氏はコーヒー・ハウス研究の意義として次の二点をあげている。13)

(1) 近代社会教育の源泉を明らかにするためにコーヒー・ハウス研究は欠かせない。また従来のイギリス教育史研究の大きな空白を埋めることができる。

(2) 現代における社会教育施設の源流をさぐることにつながる。

(1)については、近代社会教育は「市民階級の、市民階級による、市民階級のための社会教育」であるから、新興市民階級の活躍の場であったと推定されるコーヒー・ハウスは近代社会教育の最初の形態ではないかとする立場である。

(2)については、同じ自治の社会教育施設である公民館の類似点がコーヒー・ハウスにあるのではないかという仮説を提出するとともに、博物館、図書館の源流をもコーヒー・ハウスに求めようとする観点である。すなわち、初期のコーヒー・ハウスが果たした諸機能が分化、発展をして、18世紀以降、クラブや博物館、図書館へと変遷していったとする論文である。確かにコーヒー・ハウスは前述のように多くの図書を所蔵するとともに、「客寄せのために、海外のめずらしい生物の標本、民俗資料などをお」14）ところもあり、博物館的な役割をもっていたことも事実である。

以上が奥田氏の所説であるが、論文中でコーヒー・ハウス研究はこれから始まると述べられているように、コーヒー・ハウスの実態の紹介と、社会教育史における位置づけ、研究の視点を示しただけで、その実態についてもケリーの研究の紹介のみにおわっている。また17世紀末にはコーヒー・ハウスの機能は変質し、18世紀以降は他の諸施設に分化していったという説をとり、19世紀のコーヒー・ハウスについては言及されていない。

5

今日までいくつかの領域で行われてきたコーヒー・ハウス研究をまとめると次のようなだろう。

(1)17世紀中期以降、コーヒーを飲料とする習慣が広がるとともに、安価な飲料でコーヒーを飲めるコーヒー・ハウスが都市部に出現し、特にロンドンにおいて発展した。

(2)コーヒー・ハウスは、単に飲み物を飲むだけでなく、あらゆる階層の人々が集まり、様々な話題について情報交換をしたり、議論したりする集会場でもあった。

(3)ときには反政府派のため集まり場になることもあり、「コーヒー・ハウス禁止令」（1675年）が出されたこともあった。

(4)コーヒー・ハウスはそこに集まる特定の利害や関心をもつ人々の集団をつくりだした。例えば、文学関係者が多数集まるコーヒー・ハウスが生まれ、そこに一種の「文壇」を形成した。

(5)新興市民階級という一定のリテラシー（読み書き能力）をもつ階層が利用者の主力であったため、情報を求めめる要求は、新聞や雑誌の要求に直接結びついた。例えば当時のSpectator紙について「一部を平均20人がコーヒー・ハウスでまわし読みする」といわれたように、新聞や雑誌の読者層形成に一定の役割をもっていたと推察される。

(6)ところが18世紀の初頭には、アルコール類を出すコーヒー・ハウスや、特定の会員のみしか利用できないコーヒー・ハウス（やがてクラブになる）が出現し、初期の性格は失われ、コーヒー・ハウスは衰退し始めたといわれている。しかし19世紀中期にもコーヒー・ハウスという名称の施設が主にロンド
19世紀イギリスにおける読書施設の研究(1)

19世紀のコーヒー・ハウスは、多くの存在する。本稿の課題である19世紀における大衆読者層形成におけるコーヒー・ハウスが果たした役割を明らかにする作業の手がかりとして、当面次の二つの課題を設けたい。

a. 18世紀初期に衰退したといわれる“初期”コーヒー・ハウスと19世紀中期に主にロンドンに多数存在したコーヒー・ハウスとの関には、歴史的な連続性があるのか。

b. またそれらの間には、利用者層や機能の点でどのような相違があったのか。“初期”コーヒー・ハウスについては既に調べたように、新聞や雑誌の読者の増加を促したことが推察されるが、19世紀コーヒー・ハウスはどうであったのか。

19世紀のコーヒー・ハウスの性格を考える前に、アルティックの所説にもとづいて、19世紀における大衆読者層成立について若干のまとめをしておきたい。

ヴィクトリア期（1837−1901）における大衆読者層（reading public）は、今日考えられるような“まとまった（cohesive）”な集団ではなく、“均質的な（homogeneous）”集団でもなく、“公共の群（cluster of publics）”にすぎなかった。上流階級の読者は18世紀と比較して読書の質量も大きな変化はなく、中流階級の読者は余暇の増大とともに、一定の時間を読書にあてることができたが、ともに大衆読者層形成とは直接の関連はなかった。

新しい読者層形成の中核をなしたのは労働者階級である。彼らが本を読んだこととは確かな事実であるが、いくつかの不明な点があり、どれほどの読者が生まれ、どのような読者が生まれたかについては正確には把握されていない。

読書を規定した要因としてまずリテラシー（読書能力）の問題があるが、19世紀における民衆教育は、リテラシーの養成には非常に不充分なものであった。リテラシーに関する統計として、結婚届名簿に書き込むことのできた者の統計があるが、1841年には男子67％、女子61％、1900年には男女共に97％となっている。しかし、自らの名前を書くことができたとしても、それが自由に読書をする能力にははるかに結びつかない。またこの統計は全国調査であり、労働者階級のみを調査すれば、はるかに低い数字になることは確実である。より信頼できる統計としては、1833年にロンドンの職人層（artisan）を対象にした調査があるが、子供をもつ成人のうち74％は読むことができたが、残り26％は文盲であった。また1845年のイギリス中部（Midland）での調査では、初等学校に1年半以上在学した者の中、75％は実質のある読書はできなかった。

すなわち、短期間の学校教育を受けたとしても、卒業後に読書をする機会も必要性もなければ、読書を能力を失う者が多数いたのである。例えば、1867年の第二次選挙法改正によって都市の労働者が選挙権を獲得したが、実際の選挙では戸別訪問がきかんに行われたのにも文盲が多かった当時の事情のためであった。

住居を始めとする生活環境も読書と深い関連を保っていた。長時間の新しい労働のあとは、本や雑誌を読もうとする暇も意欲も生まれなかっただろうし、狭い狭い住居では落ち着いて読書をする場を労働者は確保できなかったであろう。不充分な室内照明は、栄養不良ともあいまって、目を極度に疲れさせ、長時間の読書を不可能にした。こうした外的な諸要素が、読書をする能力をもち、意欲をもっていた者も読書から遠ざけたのである。

しかし19世紀後期には、こうした悪条件を次第に改善され始め、労働時間も少しではあるが短縮されたこともあり、経済的な余裕を持ち始めた労働者が読

者層として形成されていった。劣悪な住居の条項の更改は進まなかったが、当時増加しつつあった公共図書館が静かな読書の場を提供した。しかし同時にこの時期には余暇を満たす手段として読書の強敵があらわれた。音楽ホール、安価で入場することのできる劇場、スポーツの普及、教会の行事、公園、鉄道を使っての旅行などである。

では労働者はどのような内容の本を好んで読んでいたのであろうか。なかには“まじめな（serious）”本を求める、知識好奇心の強い労働者もいたが、多くは労働者は“全く読み書きできない者（semiliterate）”を対象に書かれた、娯楽本位の図書や新聞を読む程度であった。内容のある読書をするために必要な文学上のあるいは歴史的な知識が欠如しており、充分に読むことができなかったからである。こうした娯楽を求める読者のために、ダイジェスト版の安価な図書や新聞が多数出版され、大衆読者の支持を得ていた。

以上がアルティックの所説にもとづく19世紀中期から後期にかけてのイギリスにおける大衆読者層形成のアウトラインである。労働者階級にまで読書が拡大したことは事実であるが、読書能力は非常に薄いものであり、その他生活環境など様々な内外的条件も加わり、読むやすい娯楽中心の軽い読物や新聞がまず読まれ始めたのである。また劣悪な住居条項のもとで、公共図書館の必要性も強調されたもので19世紀中期であるが、コーヒー・ハウスも含めて、自宅以外の何らかの読書施設の存在が、読書を求める労働者にとって重要な要素であったことは否定できない。

1849年にロンドンにおいて2,000軒のコーヒー・ハウスがあり、主に労働者によって利用されていた。ウィリアム・ラベットによると、そのうちの4分の1は図書室をもっており、2,000冊に達するものもあった。コーヒー・ハウスはその伝統として新聞も提供した。17) ケリーのこの記述は、先のエワート報告ののみに依拠したものであり、新たな事実は得られない。

次にウェブ（Webb, R. K.）の記述をみてみよう。

パブ（public house）、ビール・ショップ、およびコーヒー・ハウスは新聞を読む場所であった。（中略）ラベットとクリーブ（Cleave）はコーヒー・ハウスを開き、彼らの読んでいた多くの雑誌をそこで宣伝した。18)
更に1834年5月10日付のPioneer紙に掲載された投書によると、タイムズ紙がロンドン市内外の1,000軒のコーヒー・ハウスで購読されていたことが明らかであると述べている。

またアルティックも新聞を読む場所としてコーヒー・ハウスに注目をして、ロンドンだけで1840年までに1,600－1,800軒のコーヒー・ハウスがあり、中には日刊紙43部（一紙につき6部購入）を置き、更に地方紙、外国紙、24種の雑誌、4種の季刊紙、11種の週刊紙を置き、1日に1,500－1,800人の利用者のある店もあったと述べている。19）またこうしたコーヒー・ハウスは全ての階層の人々に公開されていったが、主な利用者は職人（artisan）であり、地方には同種の施設として新聞室（newsroom）が存在していたことも触れている。

以上の記述からは、19世紀のコーヒー・ハウスは新聞、雑誌、図書の読書施設として機能したもののようであったことは明らかになったが、"初期"コーヒー・ハウスのような"自由な情報センター"としての色彩はあまり強くは出にくい。

このあと、"初期"コーヒー・ハウスの持っていた読書施設としての機能を更に探るとともに、19世紀コーヒー・ハウスとの比較研究を行っていきたいが、以下は別稿にゆずりたい。

（19）Altick, The English Common Reader p.322,342
この部分の記述は磯部佑一郎氏の説明と同じ内容である。